

放射線と向き合う

3月11日の東日本大震災は、地震と津波による甚大な被害に加えて、東京電力福島第一原子力発電所の被災に伴う事故により、大規模な放射線災害をもたらしました。

原子力・放射線災害は、各種災害の中でも頻度が低く、実際の対策の経験者も少ないため、保健所等の公衆衛生従事者であっても、漫然とした恐怖感や不安を抱きながら、健康相談や放射線測定等を行う場面があったと推察されます。また医学教育においても、最新の放射線診断学や放射線治療学については豊富に学べますが、放射線災害(医療事故を含む)の特殊性や影響について学習する機会は乏しく、医師であっても、原発に近い避難勧告地域からの患者の受け入れに忌避的な態度を示すといった事例がありました。

一方、今回の原発事故をきっかけにして、放射線の健康影響に関する国民の関心が高まった他、環境放射能モニタリングや農畜産物等の放射性物質検査の結果が頻繁に報道されたため、環境や生態系への影響、および食品安全や農水産業などの分野における様々な影響を心配する声も高くなっています。

そこで本特集は、今回の原子力・放射線災害を契機として、「公衆衛生従事者が放射線(あるいは放射能)を侮らず、正當に怖がり、正しく向き合うことができるようになれば」との思いから企画しました。放射線災害の特殊性や問題点を学ぶとともに、放射線の健康や環境への影響に関する最新の研究成果を理解し、放射線災害の危機管理に関する公衆衛生活動の課題などについて、問題意識を持っていたら幸いです。加えて、地道な研究として平時から実施されてきた環境放射能モニタリングの成果が、放射線災害時にとても役立つことが判明してきましたので、環境放射能関連の話題も取り上げてみました。さらに、身近な放射線に関する公衆衛生上の問題として、食品安全基準(規制値)の設定に向けたリスク評価の考え方や、食品中の放射線物質(天然核種を含む)の実態などについても解説していただきました。

イラストレーション／丹沢裕子

